

全科協ニュース

URL <http://jcs.m.kahaku.go.jp>

全国科学博物館協議会 ☎110-8718 東京都台東区上野公園 独立行政法人国立科学博物館 Tel.5814-9863 Fax.5814-9898 平成19年3月1日発行（通巻第213号）

特集：平成18年度の企画展・特別展から

萩博物館

「幕末長州藩の科学技術—大砲づくり—」

平成18年2月4日(土)～4月9日(日)

当館は萩市郷土博物館の後継として、平成16(2004)年11月に開館した市立の総合博物館である。本企画展はある意味、総合博物館の特性を色濃く映し出したものといえる。

展示の目的は、幕末、長州藩の^{いもじ}鑄物師が洋式大砲の鑄造にどう挑んだかを描き出すことにある。当時、日本の伝統的な鑄造技術を頼りに西洋の近代的な大砲をつくるのは、空前の大事業、すなわち未知の世界との格闘であった。大砲という物騒だが、150年ほど前の「モノづくり」についての歴史的イマジネーションの場を少しは提供できたものと思う。

そもそも本展の発端は6年ほど前のある出来事にさかのぼる。平成12年、萩市内の^{ぐんじ}郡司鑄造所跡の発掘により、在来「たたら」の技術で洋式大砲を鑄造したと考えられる巨大な石組みの遺構が出土した。しかし目前に迫る新設道路の前に、いかにしてこの貴重な遺構を保存し後世に伝えるか、地元有志とともに悩んだ。というのも、在来技術で大砲鑄造を行った拠点施設として、遺構が完全な形で掘り出された例がほかになかったからだ。

この逆境のなか、国立科学博物館を中心に「江戸のモノづくり」プロジェクトがスタートしたことが幸いした。略称「江戸モノ」は、全国の大学や博物館の研究者が文系・理系の壁を乗り越えて英知を結集し、器物と文献の両資料を照らし合わせながら調査・研究を進めるところに特長がある。地元萩ではこれに連携する形で市民研究グループの「幕末長州科学技術史研究会」を結成し、そもそも郡司鑄造所とは一体何だったのか、というところから勉強会を始め

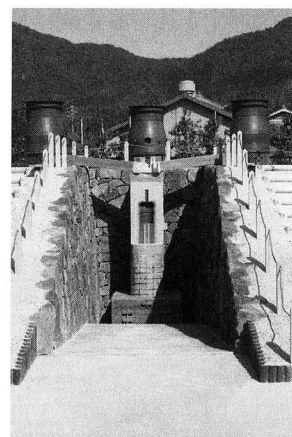
ていった。この地道な積み重ねがやがて企画展に結実する。

郡司鑄造所は、かつて長州藩を代表する鑄物師の郡司家が営んだ工房で、大砲はもとより、鍋や犁先、^{すきさき}梵鐘など多様な金属製品を生産した。ところが19世紀半ば、圧倒的な軍事力を背景に欧米列強が東アジアに進出してくると、幕府や一部の藩は旧来の和式大砲では対抗しきれないことを悟る。この対外的危機感の高まりのなかで、長州藩は嘉永6(1853)年のペリー来航をきっかけに、郡司家の工房を藩営の大砲鑄造所に指定し、3～4メートルもある長大な青銅製の洋式大砲をつくらせることになる。

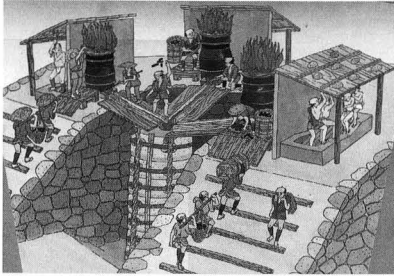
山口県埋蔵文化財センターが行う発掘現場では、金属溶解用の「こしき炉」や各種鑄型のほか、鑄造にかかわる器物・道具類が確認される一方、当館では所蔵・保管する郡司家伝来の文献や鑄造関連器具などの調査を進めた。そうして考古・歴史の分野が連携することとなり、器物(出土品)と文献(古文書)をつき合わせた研究が可能となった。

特筆すべきは、資料としては地味な部類に属するが、鑄造現場でもっとも肝心な大砲用の木組みの「鑄台」に化学的保存処理を施し、当館で収蔵するに至ったことである。

この床面約2メートル四方の鑄台には、水の浸入を防ぐため、和船をつくる「はぎ合わせ」という特殊な技術が活かされているが、このことは民俗学的アプローチによりはじめて解き明かされるものである。上記の人文科学以外に、「江戸モノ」を通じて冶金・鉱山・分析化学など自然科学の専門



移築保存された
大砲鑄造石組遺構



大砲鑄造想像復元図
(山口県埋蔵文化財
センター提供)

家からのアドバイスをも得られ、当館にふさわしい学際的
研究の成果としての展示を行えたのではないかと思う。

ただし限界を感じたのも否めない。というのも、職人技、
匠の技というのは、器物や文献に直接残ることのない「な
まもの」だからである。一度断絶してしまった技術を現代
によみがえらせるのは容易でなく、このあたりは考証復元
した図や模型などでカバーする以外にない。本展では実現
できなかったが、人員と予算、時間がともなえば、3D映
像やバーチャル展示も可能だったであろうというのが、本
展を終えたあとの率直な想いである。(道迫真吾)

馬の博物館

「馬と牛

—ひとつの蹄とふたつの蹄—

平成18年4月15日(土)～6月4日(日)

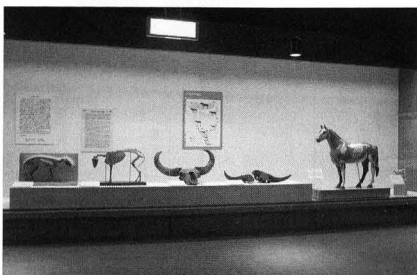
共催により展覧会を実施するには、テーマの設定方法が
いろいろあるだろう。馬の博物館でも、他館との共催によ
る企画はいくつか経験したことがある。それらは騎馬民族
や乗馬の技術、文様など特定の文化の形成と伝播を扱う展
示が中心だった。ところが、今回の展示は両館の持つ情報
を持ち寄って、馬と牛の文化を比較するというものだった。
動物同士を比べる企画は初めてであること、家畜としての
利用方法が異なることから、展示は総花式でもいいから分
野にこだわらず比較してみようという方向で準備すること
になった。共催にかんする協議は断続的に続けていたが、

ちょうど馬の博物館が財団としての創立30周年を迎える
こと、牛の博物館の所在する前沢町が合併により奥州市と
なることから、両館を記念する年として2006年を選んだ。

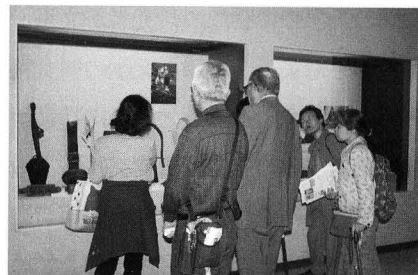
展示資料は、馬・牛に共通する性格をもつ物だけでかな
りの数量になるが、それぞれの館を紹介することも兼ねる
ため、一部の写真資料以外は他機関より借用はしなかった。
だから、馬と牛の文化全般について紹介するといっても、
おのずとテーマは限られてくる。馬の博物館では、I.馬と
牛の進化と機能、II.人とのつきあい、III.在来馬・在来牛、
IV.馬と牛の利用、V.牛馬の意匠の5部に分け、67件157点
を展示した。

毎回、特別展開催中にはアンケートを実施しているが、
今回は印象深かった展示資料をあげていただいたところ、
もっとも人気があったのは在来牛(口之島牛)の剥製で、つ
づいて牛の胃袋標本、牛馬をデザインしたコイン、蹄鉄、
化石、はにわの順番となった。剥製や胃袋は、全国的にも
数の少ない資料であり、コインや蹄鉄はふだんの生活で見
られない物だから、珍しい展示品に比較的注目が集まった
といえるかもしれない。よく目にする機会が多いからか、
牛肉料理の模型はあまり人気がなかったと思われる。いず
れにせよ、注目を浴びたのは牛に関する資料が中心だった
いってよい。

この結果から推定すると、馬と牛の文化を比較したとは
いっても、入館者は牛に興味を持つ方が多かったというこ
とになる。あたりまえのことだが、我々は馬の文化紹介を
行うとき、馬に関する資料によって解説する。馬に類似す
る機能を持つ家畜はあまりいないため、それらを無意識に
行ってきた。今回の展示により明確化してきたのは、家畜
化される動物は用途の差異にかかわらず比較できるという
ことだろう。立体化した展示というような規模の問題では
なくとも、馬の文化を相対化して見ることができし、知
ってもらえることができそうである。動物文化の総合的な紹
介への道も、少し見えたような気がする。(長塚孝)



「進化と機能」の
コーナー



カウベルを見学
する入館者

牛の博物館

「牛と馬—ふたつの蹄とひとつの蹄—」

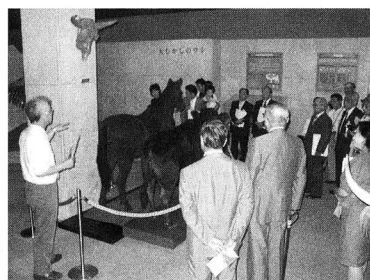
平成18年7月7日(金)～8月20日(日)

昨年の7月7日から8月20日まで奥州市の牛の博物館は、横浜市根岸にある馬の博物館との共催で特別展を開催した。タイトルは牛の博物館では「牛と馬—ふたつの蹄とひとつの蹄」とし、春に行われた馬の博物館では「馬と牛—ひとつの蹄とふたつの蹄」として取り組んだ。それぞれタイトルを換えた点は、二つの家畜の比較と、両館での共催を印象付けさせるためでもあり、とりわけマスコミから注目されることとなった。

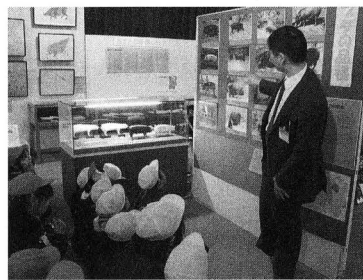
牛と馬の比較は書籍などで度々目にするが、資料いわゆる「モノ」をとおして観ることのできるのには博物館ならではのことだ。展示の目玉は、鹿児島県の口之島に残るわが国古来の在来牛の剥製と、鎌倉時代の遺跡から出土した当時の馬の骨格より復元した模型標本だ。体高は前者が115cm、後者が130cmで、黒毛和牛やサラブレッドなどの現代品種と比べひと回りも、ふた回りも小柄で、二つの標本の展示は、わが国における在来家畜を理解させるうえで意味があった。岩手はかつて優れた馬産地であり、今日では全国でも有数の銘柄牛の産地であるだけに本展に関心を寄せる市民は多かった。「これを機会に牛の博物館では、馬の資料も展示しては」という声もあり、郷土の家畜文化を新に見直すきっかけにもなった。

また、当館では昨年12月8日から本年1月28日まで「家族で楽しむ企画展2007—イノシシはブーと鳴く?」を開催した。これは硬くなりがちな博物館を子供と親と一緒に、牛とその年の干支の動物とを比較しながら、Q&Aのパネルなどを使って楽しく学べるように工夫した展示会で、「家族で楽しむ企画展」シリーズとして9年前に始まった。来館者が遠のく冬季にあって、このシリーズは、人気の高い企画展として地域に定着している。

本展ではイノシシとその家畜化型の豚、そして牛との比



日本在来の牛の剥製と馬の復元標本を見学する来館者



企画展を楽しみに訪れた幼稚園児

較について、剥製や化石、それに歴史資料をとおして紹介し、とりわけイノシシのウリ坊の剥製に人気が集まっていた。(黒澤弥悦)

千葉県立中央博物館

「驚異の深海生物

未知の深世界を探る」

平成18年7月1日(土)～9月3日(日)

深海(200m以深の海の総称)は、地球上で最大の水空間であると同時にもっとも未知の世界でもあります。漆黒の暗闇、想像を絶する高い水圧、そして凍りつくような冷たい水温など、およそ生命活動を営む世界とは思えない厳しい環境が広がり、人の行く手を阻んできたからです。しかし、そのような過酷な世界にも工夫を凝らしてたくましく生きる生物が数多くいます。そしてこのことは、一般人にほとんど知られていません。

今回の企画展では、私たちの普段の生活からは垣間見ることのできない深海に生きる多様な生物を、一般の皆さんにも知ってもらおうということで企画しました。そのため、千葉県立中央博物館が開館以来収集してきた多数の実物標本に加え、国内や海外の博物館や大学・研究所等から協力をえて、多数の標本や剥製を借用して展示しました。最終的な展示資料数は548点にものぼりました。

展示の内容は 1) 深海という世界、2) 深海生物大百科、3) 熱水鉱床生態系、4) 巨大な深海生物、5) 美しい深海生物、6) 深海生物の研究という六部構成をとり、満遍なく深海生物に関するトピックを取り上げるようにしました。とはいえ、今回の一番の目的は実物標本を見てもらうことだったので、とくに「深海生物大百科」が数としては展示の大半を占めることになりました。千葉中央博の企画展示室は両サイドがウォールケースになっており、そこに瓶詰めになった液浸標本や剥製がずらりと並ぶさまは壮観でし

た。また、目玉展示の一つとなったダイオウイカの実物大模型（海洋研究開発機構より借用）も、模型とはいえ実物がいかに大きいか実感してもらえたという点で大きな効果がありました。

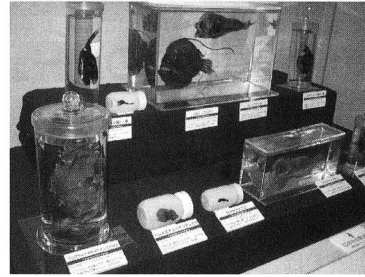
会期中のイベントとしては、1) さかなクンと見る深海の生きもの、2) 深海の生きものにさわってみよう、3) 深海生物のペーパークラフトをつくってみよう、4) 専門家による講演会を行いました。タレントのさかなクンと一緒にやったトークショーは、参加希望者が開館前に列をつくるほど好評で、結局毎回追加イベントをやらざるをえませんでした。このイベントでは、深海生物の専門家である企画者二人が、さかなクンとかけ合いながらスライドを使って深海生物について解説し、後半では勝ち抜きクイズ大会をやって会場を盛り上げました。もう一つ評判だったイベントが「深海生物にさわってみよう」です。これは、冷凍庫内に保管しておいた生の深海生物を、当日解凍して参加者にさわってもらおうという試みです。会期が夏であったこともあり、臭いが気になるかと思いましたが、参加者の皆さんは生の深海生物にさわるとあって大興奮でした。もちろん、企画者や解説員による展示解説も好評で、大勢の来館者の皆さんに深海生物をより深く知ってもらうことができました。

もう一つ評判だったのが、会期中に販売した深海生物のオリジナルTシャツでした。深海生物好きのイラストレーターがボランティアでTシャツをデザインしてくれたものが評判を呼び、計1000着以上が売れました。

千葉中央博は首都圏にあるとはいえ、交通の便が悪く集客には本当に苦労します。しかしながら、今回は展示のオリジナルTシャツが非常に高かったこともあり、県内だけでなく、日本中（北海道から沖縄まで）から幅広い年代（とくにふだんあまり博物館に来ない20～30歳代）のお客さんに大勢来てもらうことができました。また、皆さんに展示を熱心に見てもらえたことは本当に嬉しかったです。



会場中央に置かれたダイオウイカの実物大模型と、熱心に展示を見るお客さん。天井からはリュウグウノツカイなどの巨大な深海生物の剝製標本が吊されている。



奇怪なチョウチンアンコウのなかまの数々。ほとんどのものが世界初公開。世界各国の研究者から借用した研究用標本を特別に展示させてもらった。

このような展示は一朝一夕で企画できるものではないことを最後に付け加えておきます。企画者二人が研究活動を通じて築き上げてきたネットワークと信頼関係があってこそ、日本だけでなく世界各国の研究者が気持ちよく協力してくれました。世界初公開の展示物が数え切れないくらいあったのもそのためです。地道な研究活動があってこそできた今回の展示が、研究軽視に陥りがちな昨今の博物館の世界に一石を投じるようになってほしいと願っています。

（宮 正樹）

山梨県立科学館

特別展「サイエンスエコカーニバル～地球を守れ！MOTTAINAI大作戦～」

平成18年7月15日(土)～8月27日(日)

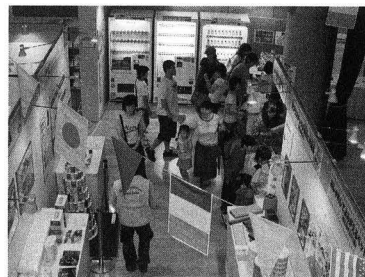
当館は、多くの人々が科学に親しみ、豊かな感性と創造性を育む拠点となることを目的に、甲府市の愛宕山こどもの国に平成10年7月に開館し、今年で9年目を迎えました。当館における特別展事業は、平成13年度より年1回実施してきました。これは1年間で最も来館者が多い夏休み期間中に、普段の展示では扱っていないテーマを扱い、新たな科学館の魅力を紹介し、より多くの方に楽しいひとときを過ごしてもらおうというねらいからスタートしたものです。

今年度は、7月15日(土)から8月27日(日)までの計43日間、「サイエンスエコカーニバル～地球を守れ！MOTTAINAI大作戦～」と題し、「もったいない」をひとつのキーワードに、リサイクルをはじめとする『環境』について考えることをテーマに開催しました。

近年、世界各国で地球環境への取り組みの必要性が強く訴えられています。そこで当館では、夏休みに来館する子供達に、エコロジーやリサイクルについて楽しみながら知ってもらい、実際の生活の中で実践するためのきっかけになることを目的にこの特別展を開催しました。



「しぜんの循環クイズゾーン」の様子



会場内の様子（一部）

今回これを開催するにあたり、約40もの企業、団体等の皆様からご協力をいただきました。当館にとってこれほど多くの方に関わって頂いた特別展は初めての事です。特別展会場内では、各企業や団体等のリサイクルをはじめとする環境活動などを実物を中心に紹介していただきました。例えば、本田技研工業株式会社様からは世界に1台しかないという、ハイブリット車のカットモデルをご協力いただき、それとともに、窓ガラスやバンパーなどの車の部品がどのように加工され、何に生まれ変わるのか、というリサイクル過程を実物で展示していただきました。また、現代における「リサイクル」の技術だけでなく、日本人が世界に誇る「もったいない精神」につながる展示も行いました。伝匠舎株式会社石川工務所様には、古い民家で使われていた木材を使用して、実際に会場内に古民家を建てていただきました。日本家屋の釘を使用しない建て方や、古い柱を再利用する方法などを見ることによって、日本人が代々培ってきた「ものをたいせつにする心」というものを子供達に理解してもらおう場となったのではないのでしょうか。このように、実物の展示を行ったことにより、来場者に多くの感動と驚きを提供することが出来ました。また、今回の特別展の準備段階に結成された、山梨県内の20人の小学生からなる「もったいないたんけん隊」の活動の様子なども会場内で紹介し、会期中には彼らが直接来場者に「たんけん隊」の活動の説明なども行いました。

また、環境という言葉からは固苦しいイメージが起きやすい事を考慮し、会場内にはさまざまなゲームやクイズを用意しました。自ら考え体験することによって、楽しくエコロジーについて知ってもらうことが出来ると考えたからです。週に1～2回の割合でクイズの内容は変更しました。また、毎日、週替わりや日替わりでメニューを変えてワークショップを実施しました。このワークショップも、多くの方からご協力をいただき、多彩なメニューが可能となったわけです。これらのクイズやゲーム、ワークショップは

リピーター対策にもつながり、多くの子供達が何度も足を運んでくれました。

結果、開催中に実施したアンケートや感想ノートには、「楽しみながらリサイクルについて知ることができた」「またこのような特別展をやってほしい」というご意見を多数頂くことが出来ました。しかし、その反面「小さな子供には分かり辛い」という厳しいご意見も頂きました。これらを受け、我々は特別展における今後の課題を見出すことが出来たと考えます。

今回の特別展を通して出来た、多くの企業や団体等の皆様とのつながりは当館の財産となりました。また、「もったいないたんけん隊」の子供達をはじめとする館外の人達が、企画段階から携わってくれたことにより、内容により広がりが出ました。また、関わってくれた人達から更に多くの人達へと輪が広がり、当館のミッションでもある『科学館は、全市民の主体的で自由な学びを支援する』につながったのではないかと考えます。今後もこのつながりを大切に、新たな科学館の魅力を提供できるようにしたいと考えます。

(杉山 恵)

大阪市立自然史博物館

第35回特別展

「大和川の自然ーきたない川？ にも こんなんいるでー」

平成18年7月29日(土)～9月18日(月・祝)

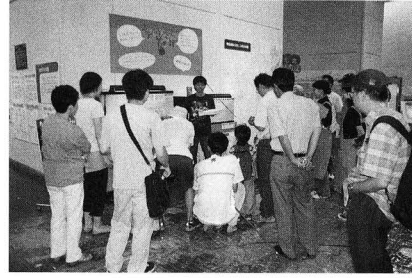
大和川は、大阪・奈良を流れる一級河川である。大阪・奈良の人口密集地を流れ、国土交通省が発表する一級河川の水質ランキングでは毎年ワースト5に入る大和川は、地元で暮らすものにとっては「汚い川」という印象が第一にある。その「汚い」という印象のためか、大和川にどのような生き物が暮らしているのかは、大阪市立自然史博物館の立地する大阪市南部を流れているにもかかわらず、これ

までほとんど注目されてこなかった。

そこで自然史博物館では、大阪・奈良を流れる身近な川として、友の会を中心とした市民とともに大和川を調査し、その成果から特別展を開催することを企画した。2002年から始まったこの調査企画は「大和川水系調査グループ・プロジェクトY」と銘打たれて、小学生から年配の方まで、まったく生き物の知識のない人からアマチュア・プロの研究者まで150人以上が参加して進められた。学芸員が世話役となり、魚、貝、甲虫、トンボ、植物、鳥、両生は虫類、水質など14の班に分かれ調査を行った。定期的に成果発表会を開催し、自分たちの調査の進捗状況や、参加していない調査班の成果を知ることで、参加者の大和川に対する興味を引き出すよう意識した。そしてプロジェクトYの4年以上におよぶ調査の膨大なデータと様々な新発見をもとに、2006年夏に特別展「大和川の自然一きたない川?にもこんなんいるでー」が開催された。

特別展の展示内容は、プロジェクトYの調査成果を中心に、大和川の概説、河口から源流までの環境の紹介、大和川水系にすむ生き物の標本とその分布図、水を生かした産業、河川改修や外来種に代表される生態学的な観点からの問題点、他水系との比較や地史的な水系の形成、そして環境保全にいたるまで、大和川という川を自然科学の観点から隅々まで網羅した内容となった。今回の展示では、身近な川に暮らす生き物が中心ということで、水槽で魚やカメなどの生品の展示を数多く行った。水槽を効果的に配置することで、標本と説明のパネルだけでは飽きてしまう小さな子どもたちにも興味を持って展示を眺めてもらえたよう

である。また、週末には会場で子ども向けワークショップを開催し、展示している標本や水槽の生き物をじっくり観察して、小さな子どもにも大和川の自然に触れてもらえるようした。また、例年行っている講演会などの他に、展示しているカメの餌やり時間を設けたり、様々な分野の学芸員が展示解説を行うなど、展示をより理解し



カメのエサやりイベント。エサやりと同時に、カメの生態などの説明を学芸員が行った。

ていただくためのイベントを数多く実施した。

広報は地元を流れる川として、博物館近隣の大和川流域を特に重点的に行った。大阪市南部の小学校には全生徒に行き渡るようチラシを配布した。また、オープン前日の内覧会にはマスコミやプロジェクトYのメンバーに加え、大阪市南部の小中学校の教員や地区の方々を招き、地域への周知を目指した。その結果、来館者アンケートや展示室内に用意した「来館者の分布図」（来館者が地図に自分の家の場所をシールで貼ってもらう）などから、大和川流域から多数の来館者があったことがわかり、こちらの期待を裏切らないものとなった。

特別展に来館された人からは、「こんな生き物も大和川にいるんだ」「いろんな種類の生き物がまだ暮らしているんだ」という驚きの声がよく聞かれた。また、水槽に飼われている魚やカメを目当てに、毎日のように訪れる子どももいた。熱心にメモを取りながら見学される方も多く、地元の自然をアピールすることの重要性を実感した。そして、企画・調査から展示までをいっしょに作ってきた市民のパワーを改めて実感した。そして、彼らといっしょにやってきたからできた特別展だという思いを、展示が終わって半年経った今も強く感じている。

(中条武司)

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 第38回企画展 「とんだネ・ついでネ・およいだネ 一種子の不思議を科学する」 平成18年10月7日(土)～平成19年1月14日(日)

茨城県自然博物館では、常設展示のみでは成し得ないタイムリーな話題を、楽しく分かりやすく来館者に提供することを目的に、企画展の開催を最も重要な博物館活動の一つに位置づけている。その開催状況については、既に全科協ニュース33巻6号で述べさせていただいた。



子ども向けワークショップ「いきものぬりえ」の風景。水槽を前に一生懸命ぬりえをする子どもたち。



企画展のポスター

今回報告する企画展は、身近な存在でありながら見過ごしてしまいがちな植物のタネにスポットを当て、散布の様式という視点からその多様性を紹介したもので、会期中に94,387人の来館者を得ることができた。企画展の開催に当たって工夫した点、苦心した点などを紹介する。

まず、企画展のポスターを御覧いただきたい。当館では企画展ごとに通常7名のスタッフでチームが編成される。うち5名が学芸系職員、2名が事務系職員である。各企画展のテーマは3年前に決定し、開催に向けて準備が始まる。そして開催の前年度に基本設計、開催半年前に実施設計、3カ月前からポスター、展示解説書等の印刷、2カ月前から展示施工と進行する。展示の内容については学芸系職員が担当するが、展示のコンセプトやポスター作成についてはスタッフ全員で検討する。今回の企画展のタイトルは6月下旬、ポスターの図案は8月上旬に決定した。タイトルやポスターの出来は、それを見た人が行ってみようという気持ちになるかどうかの動機付けを促す重要な要素となる。今回のタイトルはタネの散布様式を楽しそうに語呂よく並べたものであり、ポスター図案はいろいろなタネを使って顔を描き、タネの多様性を表すという意図で作成された。多くの来館者から「ポスターが楽しそうなのでやって来た」という声をいただくことができ、目的は概ね達成できたと考えている。

展示は、企画展示室450m²の面積に、約300種900点の標本を中心に構成した。標本は、タネのみにならないように、押し葉標本や写真を組み合わせて、どんな植物かをイメー

ジできるように心がけた。前半は、飛ぶタネ、はじくタネ、動物が運ぶタネ、水に浮かぶタネなど、散布の様式ごとにタネの多様性を紹介した。後半は、タネの化石、種子と果実の違い、タネの利用、タネの保存などタネへの理解が深まる話題を紹介した。そして、展示の中で特に工夫したのは体験コーナーである。今回の企画展に限らず当館では、さわったり、動かしたりする参加体験型の展示の導入を心がけている。今回の企画展でも、地味な「タネ」という素材をいかに楽しく動きをつけて展示するかということを中心に心がけた。体験コーナーにはタネ飛ばしの階段、タネの発射台、クルミの足湯、オナモミダーツ、ドングリゴマのコマ回し、タネの福笑いなどを設置し、このコーナーはいつも子どもたちでにぎわっていた。会期中に実施したアンケート調査では553人の回答を得たが、一番人気のアイテムは意外にもクルミの足湯で、234人の投票を得た。また、自由記入欄には95人から「こんなにたくさんの種類のタネがあることに驚いた」という回答があり、タネの多様性を紹介するという目的は達せられたと考える。体験コーナー以外にも、風洞実験装置、藤棚、顕微鏡観察コーナー、いろいろなドングリにさわろう、浮かぶタネ水槽など、変化に富んだ展示を心がけたことが、たくさんの標本展示を好意的に受け止めていただけた要因と考えている。



体験コーナー

さらに、企画展関連イベントとしてタネの工作コンクールを会期の後半に計画し、9月中旬の広報用ポスター、チラシの発送と同時にコンクールへの応募をよびかけた。最初は作品がどれだけ集まるか不安であったが、幼児から高齢者まで568点もの作品が集まり多くの来館者から「どの作品も工夫をこらし心のこもった力作でした。」という声をいただくことができた。このイベントは、当館の目指すべき目標として謳われている「自然と共生し市民と協働する博物館」を実践するものであり、企画展の成功に大きく貢献するものとなった。(小幡和男)

英マンチェスター科学産業博物館で、テレビドラマ『ドクター・フー』展を3月に開催へ

NHKのBS2で毎週火曜日に放映されているSFドラマ『ドクター・フー』は、制作したイギリスにおいて、1963年に放映が始まった人気SFドラマであり、日本でもファンが多い。今まで26シリーズが制作され、番組としては700話が放映された。

マンチェスター科学博物館では、2007年3月末から、この超ロングランのSFドラマの最新シリーズを紹介した展覧会『Doctor Who - Up-Close』が開催される予定になっている。会場ではドラマの登場人物やエイリアンをはじめ、コスチュームやさまざまな小道具とセットが見られることになっている。中でも、新しいシリーズの悪役である巨大な蜘蛛のエイリアン「ラクノスの女帝」は、マンチェスターの会場で初めて登場する。

既に2005年から、ブライトン、レスター、リバプールとカーディフの各地で開催されてきた。マンチェスターでの会場は、今までの中で最も大きい700m²のスペースが用意されている。マンチェスターでの開催：2007年3月31日から11月5日まで。 Doctor Who - Up-Close. Museum of Science and Industry in Manchester.

<http://www.msimg.org.uk/>

<http://www3.nhk.or.jp/kaigai/doctorwho/>

英インスパイア科学館で、8歳未満を対象とした化石展を4月に開催へ

ロンドンから急行で1時間で行けるノーウィッチは、大聖堂と大学で有名な地方都市だが、同市にある科学館「インスパイア」では、2007年3月31日に5歳未満を対象とした化石展がオープンする。会場となっている同館では、150m²のスペースが用意され、先史時代の動物のホンモノの化石を8歳未満の子どもが手にとって見ることができるようだ。

8歳未満の子どもは、何もわからないジャリとして片付けられがちだが、はたしてその認識は正しいだろうか？

恐竜の発掘で世界的に有名な、かのジョン・ホーナー博士（モンタナ州立大学教授・古生物学）も、初めて化石を発掘したのは8歳の時だった。8歳未満の子どもが化石を手にする前に、既に恐竜や動物の図鑑で、その化石がその

絵の生き物の死骸が「石になったもの」だという予備知識があれば、化石に触れるという体験はまさに触察学習 (hands-on learning) になると幼児教育の専門家が言っている。

Inspire discovery Centre, Norwich

<http://inspirediscoverycentre.com/>

米ユタ自然史博物館で、カエル展を6月に開催へ

ソルトレーク・シティにあるユタ自然史博物館では、2007年6月より、世界各地に棲息する珍しいカエルを紹介した展覧会『Toadally Frogs』が開催される予定になっている。

同展で紹介されるカエルは30種にわたり、個体として300匹の生きたカエルが見られる。アカガエル科に属するウシガエルをはじめ、アマガエル科に、ヤドクガエル科、そしてツメガエル科や、5種類のヒキガエル科が間近にみることが出来る。会場では、カエル同士で交わす鳴き声のコミュニケーションや、カエルのライフサイクルも詳しく紹介されることになっている。同展は、ニューオーリンズのオーデュボン水族館が企画制作をし、サンタバーバラ自然史博物館や、ミシシッピ河水族館などで開催されてきた。ソルトレーク・シティでの開催：2007年6月9日から9月3日まで。 Toadally Frogs.

Utah Museum of Natural History, Salt Lake City.

<http://www.umnh.utah.edu/museum/Exhibits/>

米モンタナ州立大学ロッキー博物館で、トリケラトプスの幼獣の化石を6月に公開へ

トリケラトプスの成獣の化石は今までにたくさん発見されてきたが、幼獣のものはまだ非常に少ない。2006年6月20日に、ジョン・ホーナー教授（モンタナ州立大学）が率いる発掘チームの一員であるソニア・スカーフさん（同大学大学院生 Sonya Scarff）が発見した化石は、まさにその数少ない貴重な幼獣（生後1年未満）の頭蓋骨の一部だ。

発掘されたのは、頭蓋骨の眼の上から生えた角（長さ約4インチ）だ。

発見場所は、ロッキー博物館の古生物学部研究部長を兼務しているホーナー教授が10年かけて発掘調査を行っているモンタナ州東部のヘル・クリーク地層だ。

ロッキー博物館は、トリケラトプスの成獣の化石が世界で最も多く所蔵されていることで知られており、今回発見

されたトリケラトプスの幼獣の化石は、大変重要な研究資料として位置づけられている。十分な調査研究を踏まえ、2007年6月に新しくオープンする常設展示「Dinosaurs Under the Big Sky」でデビューする予定だ。

http://www.centralpt.com/customer/image_gallery/189/BABY_TRIKE.GIF

<http://www.montana.edu/wwwes/facstaff/horner.htm>

<http://www.montana.edu/cpa/news/nwview.php?article=3884>

米で初めてのハリケーン博物館が2011年に開館へ

2005年の8月末から翌9月にかけて米南部を襲った二つの大きなハリケーン「カトリーナ」と「リタ」は、現地に与えた被害の大きさによって、日本でも記憶している人が多いが、このほど、米連邦政府からの助成を受けて、ルイジアナ州レーク・チャールズ市に、初めてのハリケーン博物館が整備されることになった。連邦政府高速道路管理局から総額130万ドルの助成を受けた新しい施設では、ハリケーンで犠牲になった人々の遺品を紹介し、あわせてハリケーンの被害の実態を、そしてこの特異な気象現象が起きるしくみをわかりやすく人々に紹介しようとするものだ。

約9,380m²の延べ面積が計画されている新しい施設は、トロントに本社を置く設計事務所「Reich + Petch Design International」によって建築設計と展示が手がけられる。同事務所は、オンタリオ科学館や、オンタリオ王立博物館、バージニア自然史博物館等の建築や展示の実績がある。

Hurricane Museum and Science Center, Lake Charles.

Reich + Petch Design International.

<http://www.reich-petch.com/news.html>

http://www.hurricane-katrina.org/2006/04/national_hurric_1.html

http://www.building.ca/upfront/view.php?news_id=23

米エクスプロラトリウムで、聴くしくみを紹介した常設展示が2006年10月に公開へ

聴くしくみをテーマにした常設展示コーナーが、3年の準備期間を経て、2006年10月21日に、エクスプロラトリウムに公開された。「Listen: Making Sense of Sound」と題した同展示では、音の物理的な特徴を紹介しているだけ

でなく、音を聴く生理機能や、音を聴く能力をも紹介している。

音響関連の研究者や聴覚関係の医学者等の専門家の協力を得た同展示は、同時に聴覚障害をもった人や、聴覚を頼りに生きている視覚障害者の積極的な協力も得ていることで特色がある。またさまざまな音をつくる楽器の制作者やさまざまな野鳥の鳴き声の聞き分けができる野生生物観察者も参加しており、彼らへのインタビューも下記のサイトで「聴く」ことができる。

http://www.exploratorium.edu/listen/lg_dean_video.php

http://www.exploratorium.edu/listen/lg_michael_video.php

http://www.exploratorium.edu/listen/lg_bart_video.php

http://www.exploratorium.edu/listen/lg_doniga_video.php

Listen: Making Sense of Sound.

Exploratorium, San Francisco.

<http://www.exploratorium.edu/listen/index.php>

米モンタナ州立大学ロッキー博物館で、頭蓋骨展を開催

ワニやアルマジロから、クジラまで広い範囲の動物の頭蓋骨120点を一堂に紹介したユニークな企画展「Skulls」が、モンタナ州立大学ロッキー博物館（ポーズマン）で、2006年9月23日から2007年1月28日まで開催された。

同展示は、モンタナ州立大学の世界的に著名な古生物学者であるジョン・ホーナー教授によって企画され、さまざまな動物の頭蓋骨が比較検討が一般の人にもできるようになっている。 Skulls.

Museum of the Rockies, Bozeman.

<http://www.montana.edu/wwwmor/>

米オーデュボン水族館が、2006年5月26日に再オープン

2005年8月28日から29日にかけて米南部を襲ったハリケーン「カトリーナ」の影響で、米ルイジアナ州のオーデュボン水族館は9ヶ月のあいだ休業を強いられていたが、2006年5月26日から再オープンした。

Audubon Aquarium of the Americas, New Orleans.

<http://www.auduboninstitute.org/aoa/index.htm>

* (やすい・りょう)

E-post: ZAKvaran@aurora.ocn.ne.jp

3月4月の特別展

開催館	展覧会名	開催期間
岩手県立博物館	地域展「稗貫地方の自然と文化」	3月10日～5月6日
秋田県立博物館	企画展「博物館モノ語り」	11月18日～4月15日
ふくしま森の科学体験センター	春休み企画展「スポーツの科学」	3月14日～4月15日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「大野裕明の天体写真展」	2月1日～3月31日
	ロボット展示「ロボットで遊ボット！」	3月24日～4月5日
	ホワイエ企画展「太陽・月・地球」	4月1日～5月31日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	第39回企画展「ありんこ「アント」の大冒険ー土の中の生きものを探せ！ー」	3月17日～6月17日
	パネル展示「私たちの里山活動」	3月21日～4月15日
	いばらき自然環境フォトコンテスト入賞作品展	3月21日～4月15日
高崎市少年科学館	「世界のおりがみ」展	3月21日～4月3日
	「科学絵本カーニバル」	3月21日～4月2日
群馬県立自然史博物館	特別展「自然とのたたかいー人類は生き残るために何をしてきたかー」	3月17日～5月6日
さいたま市青少年宇宙科学館	企画展「宇宙(そら)へ」～若田宇宙飛行士に続け！スペースプロジェクト in さいたま～	2月10日～4月8日
千葉県立中央博物館	春の展示「山の科学画」	3月3日～5月27日
通信総合博物館	全日本切手展2007	4月20日～4月22日
国立科学博物館	特別展「花 FLOWER 太古の花から青いバラまで」	3月24日～6月17日
	乾いた大地 砂漠ー人と自然 水がほしい！緑がほしい！	3月2日～3月11日
機械産業記念館(TEPIA)	「ちえものづくり展～社会を豊かにする最先端技術～」PARTII～社会を支える ちえものづくり～	1月19日～3月23日
	「ちえものづくり展～社会を豊かにする最先端技術～」PARTIII～未来を創る ちえものづくり～	4月11日～7月20日
地下鉄博物館	特別展「東京メトロ半蔵門線・南北線建設記録」	3月13日～4月22日
多摩六都科学館	春の特別企画展「遊びの中の科学を発見せよ！～たまろく冒険団出動！～」	3月17日～5月6日
三菱みなとみらい技術館	巡回展「科学市場」	11月28日～3月4日
横浜子ども科学館	宇宙劇場リニューアル記念特別展「大衝突展」	3月3日～4月4日
立山カルデラ砂防博物館	公募写真展「レンズが見た立山カルデラ」	2月20日～3月18日
	特別展「立山から南極へー芦峯寺5人衆 第1次南極観測隊へ参加ー」	3月21日～4月22日
佐久市子ども未来館	巡回展「ノーベル賞を受賞した日本の科学者」	3月3日～5月6日
	特別企画展「ニュートリノ展」	3月3日～5月6日
岐阜県博物館	マイミュージアムギャラリー「国際彫刻展～ボーダレス時代の造形表現～」	2月11日～3月21日
	岐阜県図書館収蔵資料展示「古地図の世界VI～名所旧跡図～」	2月17日～3月21日
中津川市鉱物博物館	第10回企画展「長島鉱物コレクションと蛭川の鉱物」	10月3日～2月4日
	第21回私の展示室「恵那山麓のスマイレたち」	3月4日～6月3日
豊橋市自然史博物館	平成18年度新着資料紹介展	3月3日～4月15日
名古屋市科学館	特別展「ようこそ恐竜ラボへ！～化石の謎をとときあかす」	3月17日～5月27日
	古川為三郎サイエンス企画展「みんなで考える地球温暖化」	3月17日～4月8日
あいち健康の森健康科学総合センター	冬の特別展示「なりきり！忍者道場」	12月23日～3月4日
	春の特別展示「チャレンジ！脳力展」	3月18日～6月17日

開催館	展覧会名	開催期間
トヨタ博物館	企画展「プラモデルとスロットカー～楽しい組立模型自動車の世界～」	12月19日～3月25日
	ギャラリー展「世界の自動車切手」	12月19日～3月25日
	企画展「ヘンリー・フォードとT型フォード」	4月10日～6月24日
みえこどもの城	企画展「なぜ? どうして?! パズルランド」	1月2日～4月8日
滋賀県立琵琶湖博物館	鉱物・化石展「続 湖国の大地に夢を掘る」	3月20日～5月6日
きしわだ自然資料館	波打ち際の自然史	2月1日～3月25日
神戸市立青少年科学館	春の企画展「科学館なぞとき探偵団」	3月21日～4月8日
兵庫県立人と自然の博物館	企画展「共生の風景～古写真にみる暮らしと自然～」	2月17日～6月10日
姫路科学館	しぜん探偵団～自然のハテナ? をさがせ～	2月10日～3月4日
明石市立天文科学館	特別展「星の王子様」	3月10日～4月15日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「第14回しぜんしくらしき賞作品展」	12月10日～4月1日
広島市子ども文化科学館	えんぜるふいっしゅ作品展	2月28日～3月16日
	特別展「未来の科学の夢絵画」	4月13日～5月6日
防府市青少年科学館ソラール	企画展「藤井旭天体写真展－賢治のみた星空－	2月3日～3月11日
	特別展「昆虫ワールド」	4月20日～6月3日
萩博物館	企画展示「幕末志士たちの手紙」	12月18日～4月8日
	萩再発見ギャラリー展示「魅せます! 萩の海」	3月1日～4月30日
徳島県立博物館	特別陳列「旅と祈りの道－阿波の巡礼－」	1月19日～3月18日
徳島県立あすたむらんど 子ども科学館	特別企画「エネルギーラボ」	12月14日～3月4日
	第16回企画展「ダンボールランド」	3月17日～4月8日
愛媛県立博物館	特別展「すばらしい石鎚の自然」	2月10日～3月4日
	テーマ展「深海の不思議な生きものたち」	1月20日～3月25日
愛媛県総合科学博物館	企画展「八幡浜の水産業」	1月20日～3月11日
	企画展「博物館講座展」	3月24日～5月13日
北九州市立いのちのたび博物館	「驚異の地下帝国 始皇帝と彩色兵馬俑 司馬遷『史記』の世界」	12月14日～3月31日
宮崎県総合博物館	企画展「日向国の江戸時代展～小藩分立って何?～」	2月3日～3月18日
	「知ってる?! 神宮の森と野鳥」展	4月28日～6月10日
鹿児島県立博物館	テーマ展「カノコユリの里『甕島の自然』」	2月24日～4月15日

【リニューアル】

横浜子ども科学館

[主な更新箇所] 宇宙劇場 (プラネタリウム施設)

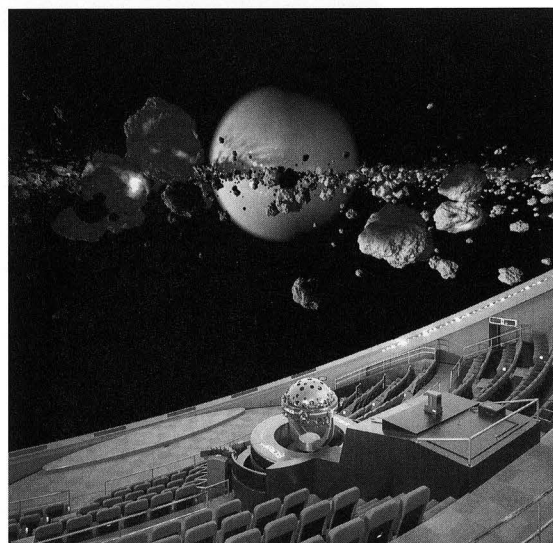
[面積] 370.87m² (直径23m、300席)

[オープンの期日] 平成19年3月3日

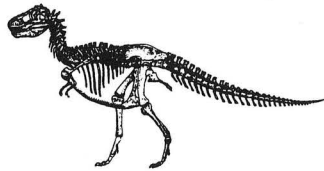
[準備期間] 平成18年12月1日～平成19年2月28日

[担当業者] 株式会社五藤光学研究所

[総工費] 約205,000,000円



※世界の化石・
 鉱物・恐竜・化石
 人類・動物骨格
 標本及び模型の
 輸入専門業者



ティラノサウルス・REX

株式会社 **ゼネラルサイエンス**
 コーポレーション

〒107-0052 東京都港区赤坂 3-11-14 赤坂ベルゴビル802
 TEL 03 (3583) 0731代表 FAX 03 (3584) 6247

高品質表現力

文化施設・商業施設・動刻・ディスプレイ・デザイン・制御演出・施工

kokoro

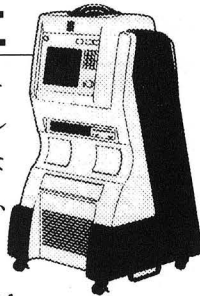
株式会社 **ココロ**

〒205-8556 東京都羽村市神明台4丁目9番1号
 TEL: 042-530-3939 FAX: 042-530-4050
<http://www.kokoro-dreams.co.jp/>

省スペース展示に最適な、小型ドームCG映像システム

メディアグローブ、誕生

メディアグローブは世界で初めてフルカラー
 投映を可能にした小型・高精細のデジタル
 プラネタリウム。さらにドーム全天に高画質な
 CG映像を投映するマルチ投映機能を持ち、
 さまざまなシーンで活躍します。



コニカミノルタ プラネタリウム株式会社

東京事業所 〒173-0003 東京都板橋区加賀 1-6-1 TEL (03) 5248-7051
 大阪事業所 〒550-0005 大阪府大阪市西区西本町2-3-10 西本町インテス11階 TEL (06) 6110-0570
 東海事業所 〒442-0067 愛知県豊川市金屋西町 1-8 TEL (0533) 89-3570
 URL: <http://pla.konicaminolta.jp>

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本(化石・鉱物・岩石)
 古生物関係模型(レプリカ)

大英博物館/恐竜復元模型

●常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)

髯東京サイエンス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
 TEL.03(3350)6725 FAX.03(3350)6745

<http://www.tokyo-science.co.jp> E-mail: info@tokyo-science.co.jp

「人が集う空間」
 という意味を、
 ノムラは
 いつもトータルで
 考えています。



集まる理由を、
 ノムラは
 知っています。

集客環境づくりの調査・コンサルティング、企画・デザイン、
 設計・制作施工ならびに各種施設・イベントの活性化、運営管理

NOMURA

株式会社 **乃村工藝社** 本社: 東京都港区芝浦4-6-4 電話03-3455-1171代

<http://www.nomurakougei.co.jp>

INTERIOR/EXTERIOR/DESIGN/EQUIPMENT
ONY KOBO CO., LTD.

東京都千代田区神田神保町2-7-3 シングマ神保町4階
 TEL (03) 3221-1102代 FAX (03) 3221-1185



動物園/水族館/博物館
 企画・設計・施工

調査・企画・デザイン・設計・製作・施工・
 監理・運営およびコンサルティング・プロデュース

より良い「社会交流空間づくり」にむけて…。

株式会社 丹青社

〒110-0005 東京都台東区上野5-2-2 TEL 03-3836-7221(代表)

札幌・仙台・新潟・名古屋・大阪・鳥取・福岡

URL <http://www.tanseisha.co.jp>

全科協ニュース編集委員会

ミュージアムパーク茨城県自然博物館 資料課長

國府田良樹

千葉県立中央博物館 教育普及課長

森田利仁

科学技術館 企画広報室次長

田代英俊

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課長

井上透

全科協事務局

国立科学博物館 広報・サービス部 情報・サービス課 守井・三浦

Tel.03-5814-9863 Fax.03-5814-9898

発行日 平成19年 3月 1日

発行 全国科学博物館協議会©

〒110-8718 台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 島崎印刷株式会社